

メッセージ

■ ヤギの島 ————— 平井玄 (2012. 10. 20)

「島々」は国境ではない。
諸民族の生業や文化が混じり合う場所である。

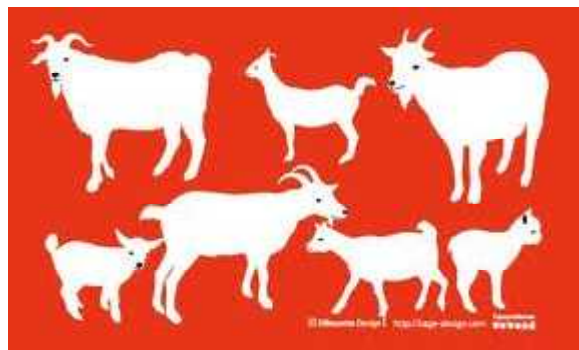
海を行き来する人々にとって、大洋は広大な広場、
多島海は曲がりくねった迷路だ。
海峡は回廊であり、ときには裏街道でもある。
そして点在する島々は宿駅や市場なのである。

かつて東アジアの水辺を荒らし回った海の「匪族」、
倭寇たちは「日本人」などではない。
彼らは、大海原を駆けめぐる多民族遊牧民だったのである。

独島、釣魚島、国後島。
再稼働への抵抗が渦巻く中、
富豪の小説家が連なる島々を国境の「柵」にする。
まるで、あの永田町「官邸前」への道を塞ぐ鉄柵のように、
私たちをそこへ閉じ込めようとする。

「東アジアに日本の友だちはいない」と中国紙は告げている。
その通りだろう。でも、寂しい列島の民にも「友だち」はいる。
国家中毒者たちによって釣魚島に放たれたヤギである。
ひとつがいのヤギは、いつの間にか殖えて数百頭にもなった。
しまいには、土中の虫から樹の皮まで島の生態系を食い荒らしてしまう。

愛国者の「友だち」はかわいそう。
この島で、口に入るものはなくなるだろう。
私たちは柵に閉じ込められたヤギなのか？
ヤギを救え？
いや、ヤギを匪族に！



■ 沖縄からのメッセージ——仲里効 (2012. 10. 17)

またしても起こってしまった。

10月17日の早朝、沖縄本島中部の路上で、一人の沖縄人女性が二人の米兵によって陵辱された。三日前にアメリカから嘉手納基地に飛来し、グアムに移動する前夜だったという。二人の米兵の性暴力には、基地帝国アメリカの身勝手なユニラテリズムが投射されている。この暴力は9・11以後、「テロとの戦争」を煽り、アフガニスタンとイラクの女性や子どもたちに行使した戦争行為と同質のものでないと誰が言えよう。

その前の10月1日、沖縄県議会と沖縄の全市町村が反対し、10万余の人々が結集した県民大会で表明された「ノーオスプレイ」の意思をまるであざ笑うかのように垂直離着陸輸送機MVオスプレイが普天間基地に強行配備された。配備後、沖縄の空を震わせながら我が物顔で飛び回っている。

沖縄の新聞紙面には「空はオスプレイ、陸は米兵犯罪」の見出しが躍っていた。戦後ゼロ年、終わらない占領と継続する植民地主義。かつてアメリカは沖縄を「極東の要石」と言っていたが、いまでもそのことに変わりはない。ただアメリカの単独支配から日米の共同管理体制となっただけにすぎない。40年前の「復帰」という名の併合は、そのことを現実のものにし、米軍の傘下でありながらも、自衛隊＝日本軍を強化しつつある。新防衛大綱での北方重視から南西重視へ基盤的防衛から動的防衛へ、そしてその転換の具体化としての「島嶼防衛」——

こうした北から南への「国防」のシフトチェンジは、尖閣列島をめぐる「領土紛争」と明らかに連動している。今年4月、石原東京都知事が尖閣列島の都購入計画を打ち出し、それに煽られるように日本政府が国有化することによって、中国と台湾の対抗措置が激しさを増していった。国境が顕現し、領土ナショナリズムが動員されていく。普天間基地へのオスプレイ配備が「台頭する中国脅威」を理由にした「抑止力」だった。

尖閣列島をめぐる「領土問題」は、近代日本の植民地領有と戦後の冷戦の力学が複雑に絡み合っていることを忘れてはならないだろう。日本と中国と台湾はそれぞれ「固有な領土」を主張している。国民国家の排他的主権を表象した「大地のノモス」が「海のノモス」と化しつつある。東シナ海はまさにいま、海がノモスとなるのだ。そのことはだが、私たちの想像力が根本的に試されているということではないだろうか。

領土ナショナリズムを内側から越え、東シナ海を異集団との交流の場としよう！

「海のノモス」から群島を結ぶ「アーキペラゴ」へ。

そして、メルトダウンした日本の政治を大衆の手に！ 原発をとめよう！ アメリカへの自発的隷属からアジアが共和する、自由の新たなる空間を創り上げよう！！

民衆の非暴力直接行動の発見は普天間基地ゲートを封鎖させた。

犯罪と暴力を生み、大地を陵辱する基地をなくそう！

普天間の空に青や赤の風船が「ノーオスプレイ」の意思を高く掲げる。風騒ぐ沖縄の地から、富山の「生・労働・運動ネット」のみなさんに、連帯のメッセージを送ります。